



1月

はじまりの椿つばき

5

雪まろげ

19

七草粥ななくさがゆ

27

2月

雪影ゆきかげ

39

寒椿かんつばき 予祝よしゆくの花

51

追儼ついな (鬼おには外)

65

追儼ついな (節分せつぶんの夜)

71

紅梅こうばい

83

3月

氷柱つららと雪

91

椿つばき 落花

107

記念写真

121

雛語ひながたり

133





かい だん
怪談

冬
1月



は
じ
ま
り
の
椿 つばき



六十日に一度回ってくる庚申の夜には、

村中の者が集まり、夜通し眠らず、

身を慎んで静かに過ごす民間信仰の行事があった。

『庚申待ち』という。

庚申の夜に眠ると、人に巣くう虫「サンシ」が、体を抜け出し、人の寿命を司る天帝にその人の犯した罪を告げに行く。

罪の分だけ寿命が縮むため、

庚申の夜には虫たちが抜け出さぬよう徹夜をした。

この風習は平安時代に日本に伝わり、

最初は貴族たちの行事だった。

それがいつの頃からか、庶民の間にもこの信仰は広まっていた。

身を慎むといっても、一晩中黙りこくっている訳ではない。

村人たちは食べ物や酒などを持ち寄り、お堂の中で、ささやかな宴を開く。

単調な村の生活の中で、六十日に一度の楽しみとなっていた。

ある年の一月、庚申の晩。

夜も更けて、下弦の月が冷たい光を投げかけている寂しい道を、

庚申堂に急ぐひとりの村人がいた。

彼は用事で村の外に出ていて、

これから庚申待ちの宴に加わろうと家を出たところだった。

冷たい風に、手に持った松明の火が揺らいだ。